



アジアの方形首括(くびくび)れ広口型魚籠(びく)

手前ステージ右3点が鹿児島、左端が喜界島の魚籠。壁面は、中国南部、台湾、フィリピン、インドネシア、ネパールなど、東南アジアの魚籠。その対応は、日本国内のどの地域よりも見事に一致する
(黎明館・福島県立博物館共同企画「樹と竹—列島の文化・北から南から—」展)



アジアの円形箕

中央壁面が鹿児島県出水市のウバラ、右手前から、鹿児島県川辺町、沖縄県名護市、フィリピン(ハヌノウマンギャン族)、ラオス・ウドムサイ県(カム族)、中国・貴州省(苗族)、ネパール(マガル族)などの網代編みの円形箕

モノグラフィ

鹿児島島の竹の文化 —民博の収蔵庫が語る アジアとの繋がり

川野 和昭(かわの かずあき)

鹿児島県歴史資料センター黎明館学芸課長

薩摩、奄美大島、喜界島、徳之島にしか分布しておらず、それ以南の沖永良部島から沖縄諸島の八重山地域まではまったく分布していない。鹿児島以北を見ても、九州山地に染み出すようにしか見られない。例外的に佐賀県東与賀町、岐阜県徳山村、明智村に飛び離れて顔を出す。

しかし、民博が収蔵するこの魚籠の分布は、台湾(アミ族)、中国広西壮族自治区(ヤオ族・壮族)、フィリピン(タガログ族)、インドネシア(スンダ族、ラオス(カトウ族)、タイ(タイ族)、ネパール(ポテ族)におよぶ。

それらと鹿児島島のモノを比べてみると、肩の経へぎの折り、不足する首を編むため経へぎを割いて本数を増やすこと、編み方が途切れるたびに振り編みで編み固めることなど、製作技術の細部にわたる緊密な一致が認められるのだ。これは、それぞれの地域で独立的に発生したモノであるとは考えられない。むしろ、「日本」という境界を越えて、「鹿児島」という地域が、東・南中国海を取り囲むアジアに繋がっているということをも物語っているという方が妥当であろう。

この強烈な体験に味をしめ、一九九八年に「海上の道—鹿児島島の文化の源流を探る—」、二〇〇一年「太鼓は語る—鹿児島とアジアの響き合い—」、そして本年には「樹と竹—列島の文化・北から南から—」という展示会を開いてきた。

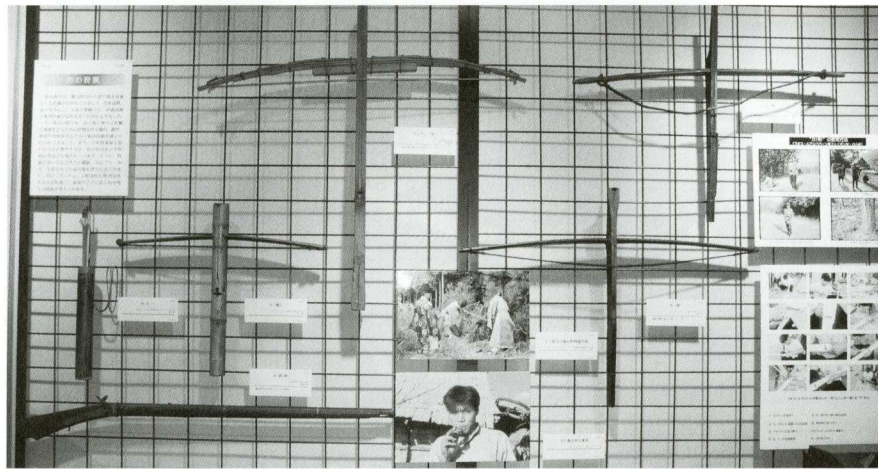


(右)鹿児島島の巻棒

隼人町(現霧島市)のマツボ。機能、形態ともにラオスのものと同じ。日本列島では鹿児島にだけ分布する

(左)ラオスの巻棒

ラオス・ファーバン県(低地ラオ族)のリャン・ファット・カオ。脱穀する稲束を巻き締めて、頭上高くかざして、叩き台に叩き付けるための脱穀具。2本の棒を1本の網でN字形に繋いである。東南アジアにはこのかたちしか分布しない



アジアの弩

上段左が鹿児島県志布志町(現志布志市)のデッキユ(台弓)。右はラオス・ウドムサイ県(カム族)のモ。下段ふたつは、ラオス・ルアンナムタ県(クイ族)のカという台付き弓。日本列島の民俗例は鹿児島だけに見られる。ラオス北部では、民族の違いを越えて男たちの必携の狩猟具である。特に、クイ族は製作技術集団の様子を呈している

こうした展示会を企画していくなかで、民博の収蔵庫のモノと鹿児島島のモノとの出合いは、際限もなく続いている。トングエ(唐鏹)とよばれる奄美諸島の畑打ち鍬、竹の背負い籠、脱穀台とそれに打ち付けるために稲束を巻き締める棒、穀物の脱穀調整に用いる片口、円形の箕、竹製の担ぎ棒、網代編み円筒形の竹製蒸し籠、竹製水筒、台付きの弩、楔締め太鼓等々である。そのほとんどが、見わけがつかないほどの精密な類似性を示すのである。

た。さらに、その分布が、連続的ではなく飛び石的である、という大きな特徴も示しているのである。このことは、柳田国男が「海上の道」で説いた島伝いの伝播や、小野重朗が示した南九州および南西諸島の域内に於ける一元的な系譜論にも当てはまらない。むしろ、藤本強がい

「鹿児島島のモノだ」と思っ近づいてよく見ると、中国雲南省やラオス、タイ、カンボジア、ミャンマーなど、中国南部や東南アジアのモノである。こんな強烈な衝撃を受けたのは、一九九四年の夏、翌年二月に開催が迫った鹿児島県歴史資料センター黎明館の企画特別展「鹿児島島の世界」の資料調査のために訪れた、民博の第二三収蔵庫のことであった。すでに、黎明館と県内の市町村立の各

このカタギイテゴは、鹿児島では大隅、

う「南のボカシの地域」の文化の具体的な検証に繋がっていくと思われる。

こうして見ると、民博収蔵庫にあるモノの存在は、ひとつではない、多様な「いくつもの日本」を解き明かす、極めて重要な位置を占めていると言ってもよいのである。

冒頭の衝撃を受けた象徴的なモノが、鹿児島で「カタギイテゴ」とよぶ、方形首括れ広口のかたちをした魚籠である。この魚籠は、ソコ(底)、ドウ(胴)、カタ(肩)、クビ(首)、クチ(口)、シタ(舌)とよばれる部分からなっている。底部は四つ目編みで方形に編み、胸部をゴザ目編みで方形に編み上げ、肩部は胸部を編み上げてきた経へぎのうち両端の数を横に倒して菱四つ目に編み、首の付け根に向けて括れるように絞って編み上げる。さらに、首の部分は残った経へぎで再びゴザ目編みでラップパ状の広口に編み上げていく。口部は巻縁仕上げにし、舌はゴザ目で円錐形に編んで口部に差し込んである。名称の「カタギイテゴ」も、肩部で編み方が一旦途切れるところに由来する。用途は川、海を問わず投網漁や笠漁などで、腰に着けて用いられる竹製籠の魚籠である。

歴史民俗資料館に収蔵されている竹の生活道具のほとんどを調査し、カード化と分類を済ませていた。その目で民博の竹の資料を見ると、鹿児島島の竹の生活道具が、東南アジアの竹の道具と製作技術や機能性の面で、極めて精緻な重なりを示すことがはつきりと認識された。そこから、「環シナ海文化の視座から」という展示会のコンセプトが明確化してきたのであった。